



神子表面水温…期間全体をとおして、概ねはなはだ高め(過去30年平均より2.0℃程度高め)からかなり高め(過去30年平均より1.0~1.5℃程度高め)で推移した(図1)。

米ノ表面水温…期間の始めと終わりはかなり高め(過去10年平均より1.0~1.5℃程度高め)からはなはだ高め(過去10年平均より2.0℃程度高め)、期間の中ごろは平年並み(過去10年平均の±0.5℃程度)で推移した(図2)。

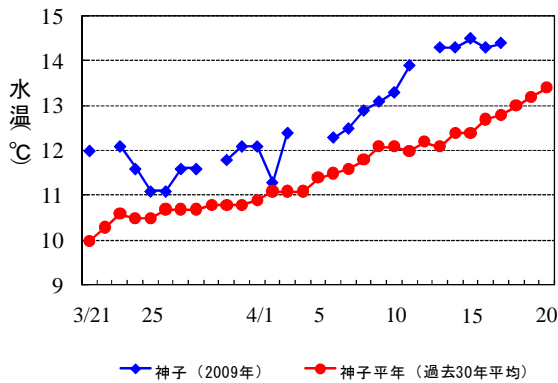


図 1. 若狭町神子地先における表面水温の推移。

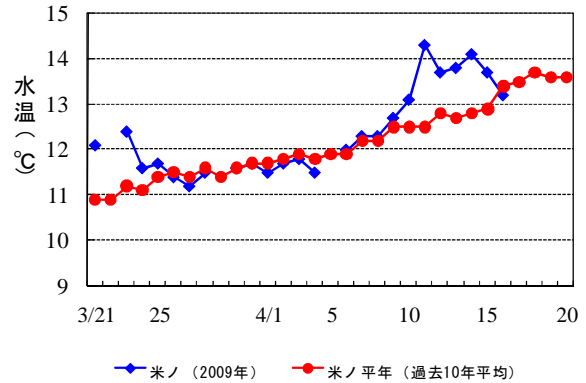


図 2. 越前町米ノ地先における表面水温の推移。

☆ 100m深水温……隠岐諸島北方域では冷水域がみられ、若狭湾沿岸域では12℃台以上の水域が広がっていた(図3)。経ヶ岬沖には13℃台の水域がみられた(図4)。

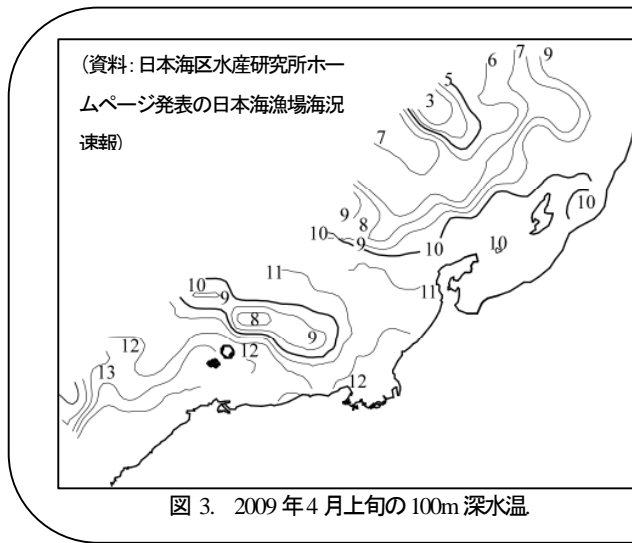


図 3. 2009年4月上旬の100m深水温

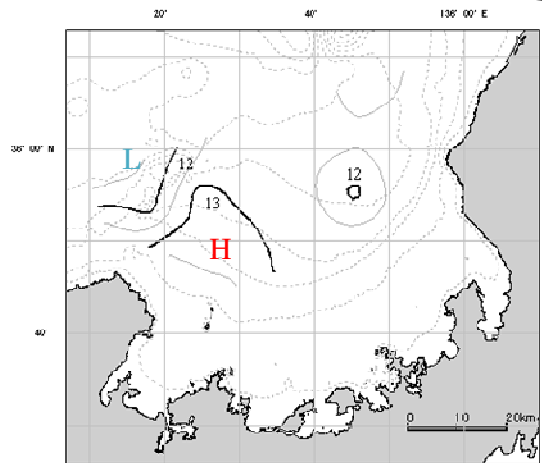


図 4. 2009年4月13~14日の100m深水温: 福井水試

平成21年度第1回日本海海況予報

日本海区水産研究所が平成21年4月~6月までの日本海海況予報を発表しましたので、関係部分を紹介します(本予報は、水産庁ホームページ[<http://www.jfa.maff.go.jp/>]の報道発表資料の中に掲載されています。)

- 2月までの山陰・若狭沖の冷水域は、規模および接岸状況とも平年並みで、3月の冷水域の張り出し状況も同様であった。今後の冷水域の張り出しは“平年並み”で経過するでしょう。
- 2月までの対馬暖流域の表面水温は、島根沖や富山湾以外の海域において、“平年並み”から“やや高め”、3月になると隠岐諸島北西海域以外の海域で概ね“平年並み”から“やや高め”で推移した。今後は“やや高め”で経過するでしょう。
- 対馬暖流域の50m深水温は、1~3月平均は日本海西部および北部とも“やや高め”で推移した。今後も“やや高め”で経過するでしょう。

(瀬戸久武)

〔漁の模様〕

2009年3月の県内の総水揚量は743tで、2008年同月を285t下回った。サバ類(2009年; 8t, 2008年; 3t以下同じ)、アカガレイ(261t, 186t)、ホタルイカ(133t, 16t)等は上回ったものの、ブリ類(2t, 41t)、サワラ類(38t, 82t)、ハタハタ(21t, 263t)、水ガニ(24t, 53t)等は下回った。

漁業種類別の状況

定置網 ……カタクチイワシ、サバ類等は上回ったが、ブリ類(ハマチ・ツバス銘柄主体)、サワラ類(サゴシ含む)等は下回り、全体では前年を59t下回った。

底曳き網 ……アカガレイ、ホタルイカ等は上回ったが、ハタハタ、水ガニ、アカエビ等が下回り、全体では前年を147t下回った。

釣り・他 ……ブリ類等が下回り、全体では前年を79t下回った。

〔県内主要漁業の3月の漁獲量〕

(単位: kg)

定置網			
魚種	2009年	2008年	99-08平均
カタクチイワシ	3,756	66	9,106
アジ類	11,828	13,486	29,718
サバ類	8,206	3,129	4,350
マグロ類	535	938	201
ブリ類	695	25,790	6,067
サワラ	37,647	81,362	25,980
サケ、マス	965	986	1,343
マダイ	547	204	367
スズキ	4,209	5,635	5,514
ヒラメ	468	186	332
その他カレイ	399	145	365
カマス	0	48	60
フグ類	2,410	2,552	1,975
メバル類	287	407	544
スルメイカ	3,264	530	7,384
ヤリイカ	4,989	2,562	3,937
コウイカ	266	614	980
タコ類	726	265	500
その他	4,550	5,496	8,882
合計	85,746	144,401	107,605

底びき網のつぎ			
魚種	2009年	2008年	99-08平均
ホタルイカ	132,860	15,767	113,074
タコ類	4,335	7,049	6,808
ズワイガニ	21,284	30,637	19,882
水ガニ	23,919	52,985	46,159
アカエビ	18,197	34,199	25,435
その他エビ	2,961	5,637	5,706
その他	22,990	38,476	38,263
合計	545,035	692,142	554,986

釣り、延縄、さし網、その他			
魚種	2009年	2008年	99-08平均
アジ類	758	1,116	1,811
サバ類	221	90	964
ブリ類	1,291	14,789	17,141
サワラ	82	519	775
マダイ	1,693	2,377	3,186
キダイ	1,752	1,498	641
その他タイ	36	584	597
アマダイ	2,503	2,762	2,417
スズキ	536	876	2,173
ヒラメ	7,009	5,882	5,419
その他カレイ	17,493	17,042	14,800
アナゴ	2,400	1,184	3,563
メバル類	6,704	9,169	8,712
スルメイカ	209	682	8,612
ヤリイカ	817	1,552	11,638
コウイカ	531	2,082	3,688
タコ類	10,364	11,349	14,248
その他エビ	34	42	4,652
その他	57,926	117,787	64,961
合計	112,358	191,381	169,997

底びき網			
魚種	2009年	2008年	99-08平均
マダイ	741	453	593
キダイ	1,221	1,542	1,541
スズキ	1,728	2,466	2,241
ヒラメ	1,309	3,069	1,956
アカガレイ	261,129	185,578	129,755
その他カレイ	29,115	48,471	37,513
アナゴ	1,018	1,658	2,452
ハタハタ	21,488	262,723	118,313
メバル類	554	747	851
ニギス	57	160	1,218
ケンサキイカ	28	349	2,190
ヤリイカ	101	177	1,035

総計	2009年	2008年	99-08平均*
	743,139	1,027,924	832,588

* まき網による漁獲量を含む。

〔近府県の漁模様〕

(3月下旬から4月上(中)旬の漁獲状況……水揚げ日1隻または1統あたり。京都府の定置網漁獲量は舞鶴漁連への1日あたりの水揚量。)

石川県 …… 定置網 …… マイワシ47kg、カタクチイワシ816kg、アジ33kg、スルメイカ84kg
 京都府 …… 定置網 …… マイワシ1.2t、カタクチイワシ57.2t、サワラ1.3t、サゴシ0.7t、サバ0.7t
 兵庫県 …… 定置網 …… ツバス178kg、カタクチイワシ20kg、アジ12kg、ヤリイカ10kg、サワラ6kg
 鳥取県 …… まき網 …… マイワシ5.7kg、カタクチイワシ31kg、ウルメイワシ11kg、マアジ6.2kg、マサバ2 kg
 (瀬戸久武)

いつまで続く?? アカガレイの豊漁

福井県においてアカガレイは底曳網漁業の重要な漁獲対象種になっています。平成 18 年の統計によると、漁獲量は 782 トン、漁獲金額は 5.5 億円で、これらは底曳網漁業全体のそれぞれ 20.6%、14.6% を占めており、数字の上からもアカガレイの重要さがうかがえます。

水産試験場で集計したアカガレイの漁獲量を図に示しました。これによると、集計を開始した 1992 年以降、1998 年までは増加傾向、その後減少傾向に転じますが、2003 年から再び増加し、2008 年は 1992 年に集計を開始して以来、最高となる 1,454 トンを記録しました。

漁期別にみるとどうでしょうか。図のグラフはそれぞれ漁期（春季漁期、秋季漁期、カニ漁期

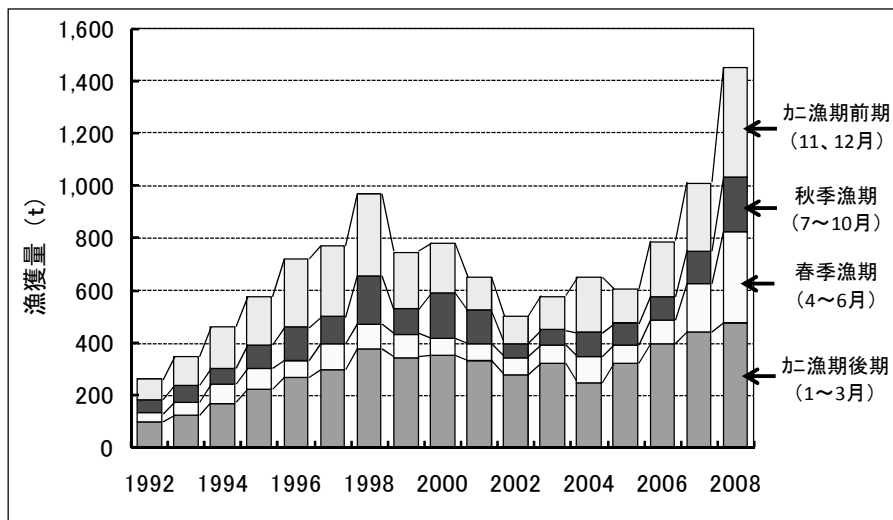


図 福井県におけるアカガレイ漁獲量の経年変化

前期、カニ漁期後期) を示しています。これを見ると 2008 年はすべての漁期で 2007 年を上回っていることがわかります。その中でも特に 4~6 月の「春季漁期」の伸び率が高く、2008 年は 2007 年の 1.9 倍になっています。7~10 月の「秋季漁期」と 11~12 月の「カニ漁期前期」も 2007 年の約 1.6 倍と高くなっており、これまでにないような増加傾向を示しています。

漁獲量増加の原因は何でしょうか？原因は二つあると考えられます。一つは「卓越年級群」の存在です。卓越年級群とは、特に個体数の発生が多かった年齢群のことをいい、人間で言えば「ベビーブーム」と呼ばれている年に生まれた人たち、といったところでしょうか。近年では 2001 年級が卓越年級群だと言われています。この資源量が多い 2001 年級群が漁獲対象となっているために漁獲量が増加した、という考えです。そしてもう一つは越前網（改良網）の導入や海底耕耘、自主禁漁など、漁業者の皆さんが取組まれている資源管理の効果がアカガレイの資源量増加につながったという考えです。

では、この豊漁はいつまで続くのでしょうか??はっきりしたことは分かりません。しかし、このまま増加し続けることはないと考えられますので、減少に転じる可能性は大きくあります。京都府が実施した調査では、若狭湾西部で漁獲されるアカガレイは雌が主に 5~7 才魚、雄が 4~6 才であり、雌雄とも 8 才以上は極端に少ないという結果が出ています。ということは、豊漁の原因の一つと考えられていた卓越年級群である 2001 年級は、もうそろそろ漁獲されなくなるということになります。もちろん、ほかの年に生まれたアカガレイが漁獲されるので、漁獲量がゼロになることはありませんが、ズワイガニでも卓越年級群が獲れなくなると、今漁期のセイコガニのように漁獲量は減少します。

底曳網の漁期はまだ続きます。今後のアカガレイの漁獲動向に関して、注意を払う必要があります。

(橋本 寛)

アオリイカの早期採卵について

水産試験場では平成19年度からアオリイカの種苗生産および養殖に関する研究に取り組んでいます。アオリイカの養殖を行うには、天然より早く、大きなイカを生産することが大きな魅力ですが、それには早期採卵が不可欠と考えています。今回は、現在取り組んでいる早期採卵試験の取り組みについて紹介します。

アオリイカは暖海性のイカであるため、福井県の冬の冷たい海水温では死んでしまいます。そのため、水産試験場では冬期は陸上水槽にイカを収容し、水温を17℃くらいに調温した海水で飼育しています。今回で2回目の親イカ飼育ですが、順調に育てることができ、親イカは、およそ600gから1500gくらいの大きさまで成長しました。そして、卵を産ませることに成功しています。

最初の産卵は3月26日でした。ちょうど産卵の様子が観察できたので簡単に紹介します。産卵は午後1時頃から始まりました。雌はプラスチックで作った産卵器の下に潜り込むようにして産卵していました。産み付ける時には、卵の入った房の端を産卵器に付けてから後ろに下がるようにして産んでいました。下がりながら体の中の卵を引き出しているようです。ひとつの房の中には6個前後の卵が入っています。そして、驚いたのが、1尾の雌が産卵したすと、他の雌も一斉に産卵を始めました。それも、同じ所に入れ替わり立ち替わり次々と産み付けていきます。しばらくすると、写真3のような卵塊が出来上がりました。また、産卵が始まると雄も興奮するのか、積極的に雌にアタックして交接（精子の受け渡し）をしようとします。

2回目の産卵は4月6日でした。以降5日から7日の間隔で計4回の産卵が確認され、合計10個の卵塊が得られました。イカは産卵後死にますが、最近死ぬ個体がみられるので、そろそろ産卵が終わりに近づいているのかも知れません。

今年は、福井県の天然アオリイカより約2ヶ月早い早期採卵に成功しました。卵のふ化には1ヶ月くらいかかりますので、まもなく最初の卵が孵化するものと思われます。ぜひ種苗生産に成功して、年内には大きなアオリイカを育てあげたいと思っています。 (畑中 宏之)

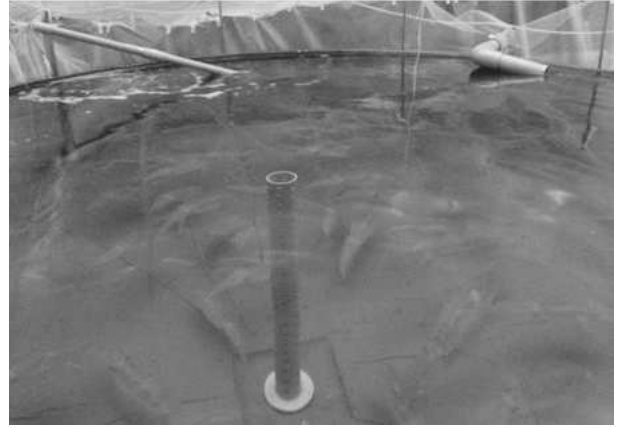


写真1 陸上水槽で飼育中の親イカ



写真2 水槽中で産卵するアオリイカ



写真3 産卵器に産み付けられた卵塊
(1房に6個前後の卵が入っている)